

「難民」に関する読書案内（ライブラリ・コーナー）

著者	小林 磨理恵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	235
ページ	47-47
発行年	2015-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003239

「難民」に関する読書案内

小林 磨理恵

今、難民が急増している。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によれば、二〇一三年末時点の世界の難民、庇護申請者、国内避難民は五〇〇〇万人を超え、一九八九年の統計開始後最多を記録した（UNHCR *Global Trends 2013*）。この背景には、収束の兆しを見せないシリア紛争がある。二年前まで難民送出の上位三〇カ国に入らなかったがシリアが、二〇一四年六月末時点でアフガニスタンを抜き、最大の難民送出国となった（UNHCR *Mid-Year Trends 2014*）。この変化はあまりに急激であり、深刻な暴力によって、人びとの生存の場が根本から脅かされる現実を、否応なく突きつけられる。

本稿では、政治的な迫害のほか、武力紛争や人権侵害などを逃れるために移動を余儀なくされた「難民」に関する日本語の研究書を、近年出版されたものから紹介したい。

まず、難民の総合的な研究書を紹介する。墓田桂他編『難民・強制移動研究のフロンティア』（現代人文社、二〇一四年）は、難民の形態や難民をめぐる制度など、多様な角度から難民の現況を分析し、現時点での難民・強制移動研究の輪郭と方向性を示す。伊豫谷登士翁編『移動と

いう経験―日本における「移民」研究の課題』（有信堂高文社、二〇一三年）は、これまで場所から人の移動を捉えてきたのに対して、人の移動の観点から「場所」を捉えなおすことを重視しながら、日本の移民研究が抱えてきた課題を明らかにする。小泉康一『国際強制移動とグローバル・ガバナンス』（御茶の水書房、二〇一三年）は、強制移動民のなかでも難民に焦点を当て、UNHCRを中心とする多国間枠組みの役割や、西欧諸国や日本の難民政策を分析し、その課題を提示する。中山裕美『難民問題のグローバル・ガバナンス』（東信堂、二〇一四年）は、国家がどのようにして難民問題に対する国際的な協調関係を構築してきたかを分析する。第七章では、アフリカ地域において域内協調が困難になる要因を整理し、二つの地域機構のもとで難民問題への協調関係が機能しているか明らかにしている。内藤直樹、山北輝裕編『社会的包摂／排除の人類学―開発・難民・福祉』（昭和堂、二〇一四年）は、社会的排除を受けた人びとを支援する場、具体的には難民キャンプや先住民定住地、障害者福祉施設等に注目し、そうした「包摂」を目的とした空間において、

「包摂」と「排除」が相互に絡み合いながら内在する様相を描き出す。難民の事例には、ザンビアの難民収容施設に居住する難民、タイの難民キャンプを経由して来日したインドシナ難民とカレン難民を取りあげている。

次に、特定の地域の難民に焦点を当てた研究書を紹介する。錦田愛子『ディアスポラのパレスチナ人―「故郷」とナショナル・アイデンティティ』（有信堂高文社、二〇一〇年）は、ヨルダン在住のパレスチナ人を例に、「故郷」から切り離されて暮らす人びとが、どのようにして故郷を認識し、故郷との紐帯を保つとしていたのか考察する。小倉充夫、駒井洋編『ブラック・ディアスポラ』（明石書店、二〇一二年）は、第一部でアフリカ大陸からの移動とアフリカ大陸内の移動を扱い、第二部では、カリブ海地域や北アメリカのブラック知識人や運動家、またブラック音楽を取りあげる。奴隷貿易、植民地支配に遡る歴史の変遷と、送り出し地域と定住地を含む広範な地域性から、ブラック・ディアスポラの有する時間的、地理的な重層性が明らかにされる。クラウス・ブリンクボイマー『出口のない夢―アフリカ難民のオデュッセイア』（渡辺一男訳、新曜社、二〇一〇年）は、アフリカの貧困や戦争から脱するためにヨーロッパを目指す難民の様態

が、難民の集団ではなく、個人の運命を通じて具体的に描かれる。久保忠行『難民の人類学―タイ・ビルマ国境のカレンニ―難民の移動と定住』（清水弘文堂書房、二〇一四年）は、ビルマのカヤー州を出身とし、タイ北西部に居住するカレンニ―難民の移動と定住を明らかにする。国を離れるプロセスとしての〈分断〉、難民状態としての〈過渡〉、再び国家に包摂される〈再統合〉としての状態の移行を重視している。

山本達也『舞台の上の難民―チベット難民芸能集団の民族誌』（法蔵館、二〇一三年）は、チベット難民芸能集団に焦点を当て、伝統公演などを通じてチベット・ナシヨナリズムが構築される様相を明らかにしながら、ナシヨナリズムからはみ出してしまふ人びとの存在を指摘し、チベット難民社会におけるナシヨナリズム構築の可能性と限界を論じる。

最後に、世界各地の難民の最新情報については、UNHCRウェブサイト（<http://www.unhcr.org/>）の出版物のページから、難民動向を分析した *Global Trends* の各年版などをダウンロードできる（二〇一四年版は二〇一五年六月に公開予定）。難民の統計を取得するには、UNHCR 人口統計データベース（<http://popstats.unhcr.org/>）を利用されたい。（こはやし まりえ／アジア経済研究所 図書館）